

出張報告書(海外用)

1/6頁

所属 (大学・短大)	京大文科大学	所属 (学科・部署)	臨床心理学科	提出日	2025年9月16日
職名	准教授	出張者氏名	清水亜紀子		
日時	2025年8月16日 (土) 8時30分	～	2025年8月31日 (日) 13時00分	うち機中泊	1泊
行先	オランダ (アムステルダム) ・ドイツ (ベルリン) ・スイス (チューリッヒ)				
目的・内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 27th International Congress (ISST) への参加 (オランダ) ・ the Anne Franl Houseへの訪問 (オランダ) ・ Dr. Wolfgang Giegerichの夢に関するプライベートセッション (ドイツ) ・ the XXIII International Congress of Analytical Psychologyへの参加 (スイス) 				
主催学会団体等	<ul style="list-style-type: none"> ・ International Society for Sandply Therapy (27th Internal Congress) ・ International association for analytical psychology (the XXIII International Congress of Analytical Psychology) 				
研究・調査発表等概要	<ul style="list-style-type: none"> ●27th International Congress (ISST) への参加 (オランダ) 心理療法、特に箱庭療法におけるイメージに関する情報を収集し、ディスカッションを行った。また、他機関の研究者とのネットワークを構築した。 ●the Anne Franl Houseへの訪問 (オランダ) the Anne Franl Houseに赴き、アンネが暮らした隠れ家の見学を通して、ホロコーストという圧倒的な力で死を余儀なくされた人々の心の在り方について、体験的に学ぶことができた。 ●Dr. Wolfgang Giegerichの夢に関するプライベートセッション (ドイツ) 夢へのアプローチについて実践的に学ぶことを目的に、Dr.Wolfgang Giegerichとの個人セッション (夢に関する討論；90分) を持ち、統合失調症と診断されたと言語男性との心理療法について、3つの夢を中心に検討した。 ●the XXIII International Congress of Analytical Psychologyへの参加 (スイス) 夢をはじめとした、ユング派の心理療法に現れるイメージに関する情報を収集し、ディスカッションを行った。また、他機関の研究者とのネットワークを構築した。 				
研究・調査発表等概要	<ul style="list-style-type: none"> ●27th International Congress (ISST) への参加 (オランダ) 心理療法、特に箱庭療法におけるイメージに関する情報収集・ディスカッションを通して、イメージの多様性ととも、心理療法の中で、イメージがどのように現われ、どのように心の作業に寄与するのかについて深く学ぶことができた。また、日本では、箱庭全体を味わうという姿勢が大切にされるが、他国 (韓国等の近隣の東アジアも含む) では、箱庭に現われたアイテムの解釈に比重が置かれるのが印象的であった。イメージに多様性からアイテムを解釈することは重要と思われるが、個々のイメージに注目しすぎることで、そこでの箱庭療法で生じていることと解釈とがやや乖離してしまうような感じも抱かざるを得なかった。箱庭療法をどのように味わい解釈していくかについて、日本に忠じたあり方をさらに探求していきたい。また、外の庭に生えている花を箱庭に取り入れた事例から、砂以外は人工物で構成される砂箱と自然との関連性について、さらに考えていきたいと思われた。さらに、ISSTのチーティングメンバーであるL. R. Freedle博士、ISST事務局の林千絵先生、ユング派分析家の鈴木康広先生との交流を深め、他機関の研究者とのネットワークの構築に着手することができた。 ●the Anne Franl Houseへの訪問 (オランダ) アンネが暮らしていた隠れ家に実際に足を踏み入れると、思春期のアンネにとって、親戚でもない中年男性と一緒に同じ部屋を使わざるを得なかったことを想像すると、とても複雑な思いを抱えていたのではないかと思われ胸が苦しくなった。極限状態に置かれているため、様々なことを我慢せざるを得なくなかったことは推測される。しかし、チャムと呼ばれる同性のかけがえのない友人との関係に支えながら、守られた中で私という主体を形作っていく思春期という時期において、アンネにとって、想像上の友達である「キティ」に向けて日記を書くということが、心を支える重要な体験であったと痛感させられた。 ●Dr. Wolfgang Giegerichの夢に関するプライベートセッション (ドイツ) Dr. Wolfgang Giegerichから、夢自体が重要であり、夢のディテールを尋ねる質問は必要であるが、クライアント自身の連想は不必要であるとの指摘を受けたことが印象深かった。一方で、臨床場面を振り返ると、夢からの連想 (感情も含む) によって、現実世界の話を広げていくことができる側面もあると考えられる。そこで、夢の内側へと入っていくアプローチと、夢から外側へと広がっていくアプローチの両者を明確に区別しながら、使い分けていくことも必要なのではないかと思われ、今後さらに探求していきたい。また、プライベートセッションで体験的に学ぶことができた夢へのアプローチを、本年度の研究活動である『心理療法に現れてくるイメージに関する心理臨床学的研究』・『遺族ケアにおける悲嘆夢の臨床的活用』・『夢とバウムテストを通した乳がん患者の心理的支援の検討』に活かしていきたいと考えている。 ●the XXIII International Congress of Analytical Psychologyへの参加 (スイス) 夢をはじめとした、ユング派の心理療法に現れるイメージに関する情報収集・ディスカッションを通して、心理療法において夢がどのように現われ、どのように活かしていくか、イメージの多様性、最新の夢研究などの知見を得ることができ、今後、本年度の研究活動である『心理療法に現れてくるイメージに関する心理臨床学的研究』・『遺族ケアにおける悲嘆夢の臨床的活用』に活かしていきたいと考えている。また、がん患者さんの夢について研究されている精神科医・ユング派分析家Giedre Bulotiene博士との交流を深め、今後、がん患者の夢の国際比較研究を行う土台作りをすることができた。他機関の研究者とのネットワークを構築した。 				

研究調査活動経過報告書（海外用）

2/6頁

出張日程		<ul style="list-style-type: none"> ○ 出張期間内のすべての日の研究調査活動の詳細について、午前・午後ともに記入してください。（活動内容、場所がわかるようお願いいたします） ○ すべての日程について書ききれない場合は、このページを複数枚コピーの上、記入してください。
2025/8/16 (土)	午前 午後	日本（関西国際空港）からオランダ（スキポール空港）への移動
2025/8/17 (日)	午前 午後	Dr. Wolfgang Giegerichの夢に関する個人セッションの準備
2025/8/18 (月)	午前	27th International Congress (International Society for Sandplay Therapy) の開催会場 (Egmond aan Zee) への移動
	午後	<p>27th International Congress (International Society for Sandplay Therapy) への参加</p> <p>Welcome Receptionに参加し、各国の参加者たちとの交流を深めた。なかでも、ISSTの事務局を担当されている林千絵さんとの出会いは大きかった。ISSTに関する情報リストに加え、日本でISSTメンバー資格取得のために勉強している方々のメーリングリストに登録していただくことができた。今後国内の資格候補メンバーとも情報共有しながら、共に学んでいきたい。</p>
2025/8/19 (火)	午前	<p>27th International Congress (International Society for Sandplay Therapy) への参加</p> <p>●『The Paintings of Vincent van Gogh: a Process of Individuation (#34)』 (by T. Foks-Appelman)</p> <p>フィンセント・ファン・ゴッホの絵画を錬金術的過程と比較することを通して、彼の個性化の過程が論じられた。絵画作品だけでなく、弟テオや家族、友人たちとの間ではほぼ毎日交わされた膨大な書簡の追跡も行われ、さまざまな表現からゴッホの心情や生き様について理解することができた。</p> <p>●『Some Reflections on the Other in Dream and Sandplay Therapy』 (by Takuji Natori)</p> <p>私をreflectする方法としての「天を仰ぐ」というイメージを軸に、垂直方向と水平方向のreflectが検討された。興味深かったのは、ディスカッションにおいて、韓国においては、天は上方ではなく心の中にあるという発言がなされた点であった。西洋においては、あの世が神のいる場所（天）として上方に位置づけられているのに対して、日本の場合には、山に還る・ニライカナイなどのイメージのように、水平方向に位置づけられる場合がある。「天」や「あの世」と表現される「the Other」が各文化圏においてどのように位置づけられるか、また、他の文化圏との比較・日本における過去と現在を比較を通して、現代の日本社会において、「the Other」がどのように捉えられているについてさらに探求していきたい。</p> <p>●Case Study『The Numinous in Times of Distress due to Unexpected Surgery (#46)』 (by J. Tatum)</p> <p>腫瘍の手術という予期せぬ医療緊急事態に直面した際に、ヌミノースと出会った事例について検討された。箱庭における砂の扱い方が特徴的な事例であり、砂に触れることを通して、クライアントが自らの心身を癒やしていった過程が見事に表現されていた。これまでの研究でも指摘されていることではあるが、身体疾患を抱えるクライアントにとって、箱庭療法が持つ砂の意味についてさらに考えていきたい。</p>
	午後	<p>27th International Congress (International Society for Sandplay Therapy) への参加</p> <p>●『Fire and Fertility: The soul-preserving function of the "autonomous Other" (#139)』 (by L. R. Freedle)</p> <p>ペレ（ハワイの火山女神）の神話と象徴性、そして臨床事例を通じて、箱庭療法において、「自律的な他者」との遭遇がいかに魂のこもった生き方を生み出すかが探求された。その中で、ペレは、生命を生み出す自然の現象自体であることが示唆された。また、COVID-19によるパンデミックを挟んだ事例であり、面接構造の工夫（外のテラスで話をした後、箱庭を行うために部屋に入るなど）を行いながら、自然と共にクライアントが回復していく様子が描き出された。ハワイの自然がクライアントを癒やしていく過程は、日本においてどのように自然を心理療法の中に組み込んでいくかについて考えさせられるものであった。</p> <p>●『Sandplay and the Wounded Healer (#64)』 (by M. Troudart)</p> <p>2023年10月7日のハマスによるテロ攻撃後、イスラエルでは、現地の人々だけでなく、セラピスト自身も直接的・間接的に恐怖を体験し、深く傷ついている。そこでの箱庭療法を用いた試みを通して、戦争やトラウマの時代に、他者の傷と自らの傷の両方に直面するメンタルヘルス専門職にとっての箱庭療法の意義が論じられた。National Traumaとして、セラピスト人もトラウマのリアリティーを共有する中で重要だったことの1つ目は、セラピストたちでサポートグループを作り、そこで話し合うことであった。2つ目は、イメージを信じるということであった。3つ目として、大きなインパクトに対する高尾度もの動きの中で、自身の内なる癒やし手と繋がることであった。</p> <p>●Case Study『Finding a Rebirth Way Out Of a Death Impasse - A Journey of Healing: Exploring the Individuation of a Nine-Year-Old Girl's Alchemical Imagery of Death (#131)』 (by Y. Chan)</p> <p>希死念慮・自殺企図が繰り返される9歳女兒との箱庭療法について検討された。初めの箱庭では、中国語で、“死”・“I”を意味する言葉が示され、死の世界との近さが表現された。その後の箱庭には、ほとんどペンギンが登場し、過酷な環境でも生き延びようとするクライアントの力が表現されているように思われた。そして、最後から1つ前の箱庭では、ニックネームが表現され、死の世界を離れて、クライアントが“I”を生き始めていることが示唆された。これらの過程を通して、クライアントが“I”という個としての存在を形作っていったことが十分に理解できた。</p>
2025/8/20 (水)	午前	<p>27th International Congress (International Society for Sandplay Therapy) への参加</p> <p>●Case Study『Refugees of the Soul: Meeting the Other Beyond Language (#101)』 (by R. Zeiger)</p> <p>多くのPTSD症状を抱える女の子との箱庭療法について検討された。印象的だったのは、セラピストが休みを取った後、クライアント初めて涙を流し、怒りをぶつけたことである。怒りを通して、深い感情に直接触れられるようになったことが、クライアントの中に秩序をもたらし、自我の発達にもつながったように思われた。</p>
	午後	<p>27th International Congress (International Society for Sandplay Therapy) への参加</p> <p>●Case Study『Second Session after an internal of Ten Years』 (by Y.Suzuki)</p> <p>二度目の来談をされた60代女性との箱庭療法について検討した。転移・逆転移の文脈からも解釈も興味深くはあったが、何よりも、クライアントが、喪の作業に取り組むことを通して、新たに生まれ直すと同時に、死にゆく準備を始めることができたように思われたことであった。今回の大会を通して、鈴木氏とは交流を深めることができ、今後、『遺族ケアにおける悲嘆夢の活用』の研究会に講師として来ていただくことも計画している。</p>

2025/8/21 (木)	午前	<p>27th International Congress (International Society for Sandplay Therapy) への参加</p> <p>●Research Poster Presentation 『The Use of Sandplay in Educational Consultation Training for Schoolteachers (#110)』 (by T. Kume) グループによる箱庭療法が学校教員に与える影響について検証した調査研究の発表がなされた。その結果、参加者は超越的な力への気づきを深め、生徒の理想化されたイメージへの執着を減らすのに寄与した。また、自己認識の向上と多様性への深い理解が報告され、1年後の追跡調査においては、共感理解とメンタルヘルスに好ましい変化が確認された。これらのことから、グループによる箱庭療法が、心理療法だけでなく、トレーニングやワークとしての意義をさらに探求していく必要性を感じた。</p> <p>●Research Poster Presentation 『Psychological Trends of Japanese University Students and Characteristics of Sandtray Produced by University Students (#106)』 (by S. Fuwa) 日本の大学生の心理的傾向の変化に対応し、30名の学生に3回連続で制作してもらった箱庭を分析することで、これらの心理的傾向が箱庭にどのように影響するかについて調査した研究の発表がなされた。その結果、1980年代の日本の大学生と比較すると、現代の日本の大学生は、使用するアイテムが少なく、特に建築的な表現が少ないことが明らかになった。さらに、直線的な表現が多く、高さに関連する表現が少ないことも判明した。ディスカッションの中で興味深かったのは、1980年代の大学生と比べると現代の大学生は、大学に行く目的・理由が漠然としたところがある点が指摘され、そうした社会状況が箱庭に与える影響も少なくないのではないかと思われた。</p> <p>●Case Study 『L-Ghazuza - embracing the esoteric Maltese witch in Jungian Sandplay (#31)』 (by C. Francica) カグザ (マルタの魔女) のイメージから、箱庭療法の検討がなされた。その中で、善と悪の両面性を併せ持つ存在である魔女は、集合的無意識に根を下ろしており、力強い女性性の発揮へと繋がる力を現代においても有していることが示唆された。</p>
	午後	<p>the Anne Feankl Houseへの訪問・見学 (島根大学 山崎基嗣講師と共に)</p> <p>アンネが暮らしていた隠れ家に実際に足を踏み入ると、思春期のアンネにとって、親戚でもない中年男性と一緒に同じ部屋を使わざるを得なかったことを想像すると、とても複雑な思いを抱えていたのではないかと思われ胸が苦しくなった。極限状態に置かれているため、様々なことを我慢せざるを得なくなかったことは推測される。しかし、チャムと呼ばれる同性のかけがえのない友人との関係に支えながら、守られた中で私という主体を形作っていく思春期という時期において、アンネにとって、想像上の友達である「キティ」に向けて日記を書くということが、心を支える重要な体験であったと痛感させられた。日記や小説、現代であればSNSを用いた投稿など、書くこととそれを誰かと共有することの意義についてさらに考えていきたい。</p> <p>オランダ (スキポール空港) からドイツ (ベルリン・ブランデンブルク国際空港) への移動</p>
2025/8/22 (金)	午前	<p>Dr. Wolfgang Giegerichの夢に関する個人セッション</p> <p>最も大きな学びは、出張者自身の事例を通して、Dr. Wolfgang Giegerichの夢に対するアプローチを体験的に学ぶことができた点である。出張者は、クライエントに夢から連想したことを尋ねていたが、Dr. Wolfgang Giegerichから、夢自体が重要であり、夢のディテールを尋ねる質問は必要であるが、クライエント自身の連想は不必要であるとの指摘を受けた。確かに、夢からの連想をクライエントに尋ねることは、夢自体から遠ざかってしまう危険性があり、夢に徹底的に内在しようとするDr. Wolfgang Giegerichの夢へのアプローチを示す指摘であったと考えられる。ただ、臨床場面を振り返ると、夢からの連想 (感情も含む) によって、現実世界の話を広げていくことができる側面もあると考えられる。そこで、今後は、夢の内側へと入っていくアプローチと、夢から外側へと広がっていくアプローチの両者を明確に区別しながら、使い分けたいことも必要なのではないかと思われた。</p>
2025/8/23 (土)	午後	<p>Dr. Wolfgang Giegerichの夢に関する個人セッションの体験を踏まえた、悲嘆夢に関する著作の執筆</p>
2025/8/23 (土)	午前	<p>ドイツ (ブランデンブルク空港) からオランダ (スキポール空港) を経由し、スイス (チューリッヒ国際空港) への移動</p> <p>悲嘆夢に関する著作の執筆</p>
2025/8/24 (日)	午前	<p>Bollingen Towerへの訪問</p> <p>The XXIII International Congress of Analytical PsychologyがBollingen Towerへの見学ツアーを組んでいたが、すぐに完売してしまったため、出張者個人でBollingen Towerへ訪問した。内部までは見学できなかったが、実際に目の当たりにすることで、Jung自身が手作業で一つずつ作り上げていく過程の中で、Bollingen TowerがJungの「霊性の場」として醸成されていく様子を想像することができた。また、母親の死後からJungがBollingen Towerを建て始めたことを踏まえると、喪の作業を含めた心の作業を行っていく際に、手作業 (例えば、箱庭、描画など) を果たす役割についてさらに検討していく必要があると思われる。</p>
2025/8/25 (月)	午前	<p>the XXIII International Congress of Analytical Psychologyへの参加</p> <p>●『From Individuation, through Synchronicity to the Psychoid Imagination and the Reenchantment of the World』 (by Joe Cambray) Joe Cambray博士は、ワークショップを通して、より日常的な回想法を多段階のプロセスで探求してきている。具体的には、まず、想像力豊かなエクササイズを通して、生涯にわたっての驚きと畏敬の念を呼び起こし、次に自然界の文脈で回想していく。一般的に、「パートナー」に対する感謝の気持ちが自然に湧いてくるように、環境の要素をサイコイド的な対話のパートナーとして扱うことで、「想像上の隣接可能性」に入り込み、新たな繋がりが築かれていく可能性がある。こうしたプロセスのアイディアは、ユングの絵画から始まっており、具体的には、「Reenchantment」(「精神生活の重要性と殊外の克服が中心」となる立場) における芸術の幻想的・神話的な役割に対する興味から生まれてきたとのことである。サイコイド的想像力をさらに掘り下げたアーティストを探す内に、Joe Cambray博士は非合理的な知恵を形にしようとするシュルレアリストたちから始まる一連の「隣接する可能性」を横断していることに気づき、ユングが共時性エッセイや後の錬金術作品を発表したのと同じ時期に、特に創造的で斬新な作品を制作していた難民の女性シュルレアリスムの画家たちに焦点を合わせていったとのことである。こうしたJoe Cambray氏の探求は、現代人の精神にとって不可欠なものである3つの段階、「Enchantment」(「主観と世界との事前意識的な融合」) から、「Disenchantment」(「かつてのアニミスティックな妄想からの解放」) を経て、「Reenchantment」へと移行する過程について考えていく重要な材料を与えてくれたと思われる。</p>
	午後	<p>the XXIII International Congress of Analytical Psychologyへの参加</p> <p>●『Divination and Consciousness』 (by John Beebe & Chenghou Cai) John Beebe博士によれば、占いが人を有益に導くためには、その人の中でいくつかのことが既に心理的に生きていて、効果的である必要があり、そうした前提条件の内、まず最も重要なのが状況判断であるとされている。そして、Jungの元型概念は、状況について学ぶための理想的な視点となる。また、占いが洞察力をもたらすための第二の前提条件は、創発的なものに対する開放性であるとされている。Jungが大切にしていたシンクロニシティ (共時性) は、自分の人生に実際に現れるものと自分の心理的態度との関連性を確認するものであり、そうした開放性への姿勢を関わっている。第3の前提条件は、タオの中にあるということであろうということを経験することであるとされている。Jungのタオの概念は、タオに対する自我の態度を「letting things happen (成り行きに任せる) 」(Jung 1931/1967, CW13, par.20) と表現したところによく現れている。これらのことから、ユング派の心理療法は、perfectではなくcompleteなアプローチである点を再認識することができた。</p> <p>●『A Rhizome of the Non-understandable: Gender Diversity and the Emergent Androgynus in Clinical Prac.』 (by M. Saiz, P. Abalos Barros, C. Grez, M. S. Toloza Gallardo, M. Porre Ibacache, J. Falcone & G. Campi) 夢に関する研究プロジェクトにおいて、予期せぬ形で、浮かび上がってきた「Androgynus」というイメージについて、研究結果や臨床事例を交えながら紹介された。「Androgynus」は、アニメでもアニムスでもなく、既知のカテゴリーに囚われることを許さないエネルギーである。そして、生きた象徴として、変異し、変容し、固定化することのない魂の形であり、我々が生きる時代と深く共鳴するものである。「Androgynus」は、変容する魂の象徴であり、既に存在しないものともまだ生まれていないものとの間の境界に住まい、統一でも混沌でもなく、生きた緊張を提供することになる。うつ状態にある50代の男性の事例でも示されたように、「Androgynus」の象徴的な力は、葛藤を解決することにあるのではなく、その両義性を維持し、精神に完成することのない対話を開かせることである。こうした「Androgynus」は、ジェンダーの既成の形式を破壊しうる力を持ち、多様性が叫ばれる現代を考える上で重要なイメージであると思われる。</p> <p>●『Unconscious images as initiation into the mystery of death』 (by Giedre Bulotiene) がん患者の夢を通して、生命を脅かす病気にかかったときに人の精神に起こる集合的無意識の働きが明らかにされた。Giedre Bulotiene博士は、重病者が周囲から切り離され、無意識の内的世界に没頭しているかのように多くの時間を過ごしている様子を観察し、それをウロボロス状態と呼んでいる。Neumann (1954, p.276)によれば、ウロボロスは、無意識への沈没を象徴している。尾を飲み込む円形の蛇のシンボルで擬人化されたウロボロスの段階は、完全な離脱を意味し、同時に全体の完全な統合を意味する。ここから、ウロボロス状態は限界状態であり、原初の叡智と見なすことができることが指摘された。そして、結論として、終末期の患者と接する際には、原型的イメージを通して展開される深遠な変容体験を受け入れるようサポートすることが重要であり、そうすることで、セラピストは患者が差し迫った死と折り合いをつけることができることが示唆された。出張者の臨床経験や研究と深く関連する研究発表であり、発表後、Giedre Bulotiene博士とも個人的にディスカッションし、今後、がん患者の夢の国際比較研究を行う土台作りができた。</p>

	午後	<p>●『Rose's Stone Soup: Synchronicities at the End of Life.』 (by Daniel Ross)</p> <p>高齢女性との心理療法についての検討がなされた。その中で、その女性の死とセラピストの母親の死が同時期に起こるといったシンクロニシティが生じてきたのが印象的であった。死と深く関わる心理療法においては、この世とは別の次元が開かれていく必要があるため、自ずとシンクロニシティが生じやすいのだと思われる。また、シンクロニシティが起こったことを認めるだけでなく、そこに意味を見出すということが、セラピストには必要になるのではないかと考えられた。</p> <p>●『C. G. Jung and the non-understandable question of life after death』 (by Luis Moris)</p> <p>死や悲嘆、喪失と向き合っ中で、ユング派アプローチの特異性は、死後の生命への可能性へと開かれている点にあることが指摘された。Jung自身が『赤の書』などを通して、死の神秘とどう格闘し、死後の魂についてどのように考えていたかについて、改めて学び直していきたいと思われた。</p>
2025/8/26 (火)	午前	<p>the XXIII International Congress of Analytical Psychologyへの参加</p> <p>●『On Death, Hope and Soul: When the Self compensates Chaos』 (by Kristina Schellinski)</p> <p>Kristina Schellinski博士の個人的な経験、2つの臨床例、生と死の両極を橋渡しするJungのビジョンを通して、ユング派の観点から、生と死について検討がなされた。その中で、生と死を対立するものとしてではなく、全体として見るという、自己の存在の究極の体験が重要であることが示唆された。そして、苦しみに直面しながらも、精神とつながり、自己とつながることで、相反するものを行き来を超えた全体性の体験が可能になり、二極性から解放されることになることが指摘された。Jung自身が、死とは結婚であり、全体性に迎えられていくことであると述べており、この意味について改めて考えていきたい。</p> <p>●『Child Analysis and Death』 (by Moshe Alon & Lidar Shany)</p> <p>2023年10月7日のハマスによるイスラエル攻撃後、イスラエルの子どもたちの安全意識がどの程度打ち砕かれ、子どもたちの内的世界を包んでいた繊細な精神的保護の膜がどのように暴力的に破られたかが示された。子どもの時代の楽園から放り出された彼らへの心理的応急処置として、枠組みと方法の安定をまず整え、回復させ、そこからトラウマとなって出来事や扱うことであった。子供たちの中には、不幸にも殺された者と誘拐された者がいた。これは耐えがたい現実であり、それ故に明確に語られることはなかった。沈黙を通じて子どもたちに伝えられるメッセージは、大人自身もその話題について話すことを恐れていることで、大きな不安を引き起こす可能性があった。また、さらに不安を煽るもう一つの暗黙のメッセージは、大人たちがもうここにはいない人たちのことを忘れてしまっているというものであった。こうしたことは、子どもたちに、「もし私がいなくなったら、大人たちは私のことも忘れてしまうのだろうか?」という恐ろしい疑問をもたらすことでもあった。そうした状況の中で、語られていないことを語る手段の一つとして、絵を描くということが持つ意味が示唆された。また、家族とセラピストだけでなく、コミュニティーの力が必要であることが理解された。</p>
2025/8/27 (水)	午後	<p>●『Looking Once More Into The Night: Reflections on the "Un" in "The Unconscious"』 (by John Hoedl, Tsuyoshi Inomata & Michael Whan)</p> <p>猪股博士の発表の中で、『竹取物語』が扱われた。物語の最後は、かぐや姫がいなくなり、何も残らないというの、日本のおとぎ話の典型である。しかし、この無の状態が物語の目的地であるとも言える。つまり、この物語では、さまざまなものが否定され、地上における天皇の最高の権力と威光さえも役に立たない。老人と老女の絆や親愛の情でさえ、かぐや姫を地上に留めておくことはできない。何も役に立たず、かぐや姫は消え去り、最後には「無」だけが残る。しかし、この「無」は、すべてを失った絶望とは言えない。この「無」の状況に深く沈むことで、「無意識」への扉が開かれる。この物語の目的は、未知なるものを体験することとも言える。これらのことから、『竹取物語』では、一貫して、理解できないものとの関わり、いわば、無意識の「無」と同義である影の世界との関わりというテーマが探求されている。『竹取物語』は「無」と関わりつつも、日本人としては、そこに美しさや悲しみを感ずる。日本の「無」における美しさや悲しみについてさらに探求を深めていきたい。</p> <p>●『Artificial Intelligence & Analytical Psychology』 (by Stephen Garratt, Robert Bosnak, Tine Papič & Stephen Aizenstai)</p> <p>大変興味深かったのが、Robert Bosnak博士が自らの夢について、AIをライブで討論されたことである。その後、ディスカッションの中で、「AIの心理療法家が進化していった先に、人間の心理療法は不要になるのではないか?」という問いかけがなされたことである。Robert Bosnak博士をはじめ、AIの研究者も、生身の心理療法が不要になることはないかと断言され、今後心理療法を続けていく大きな支えを得られたように感じた。</p>
2025/8/28 (木)	午前	<p>the XXIII International Congress of Analytical Psychologyへの参加</p> <p>●『Non-understandable world of ASD: therapist's implicit understanding and subsequent deepened understanding』 (by Toshio Kawai)</p> <p>軽度のSAD傾向を持つ7歳少年との心理療法が、セラピストの夢も含めた形で発表された。ASDの理解できない世界がどのように治療的にアプローチされるのか、また、セラピーにおける暗黙の理解がどのように変化し、後に深まり、他のケースにも貢献するのかについて深く考えさせられる事例であった。ASDに限らず、全てのクライアントが、心理療法において理解できないものを持っているという前提のもと、理解できないものと心理療法家がどう関わっていくかが重要であることが理解された。</p> <p>●『A Late Confirmation? Review of C.G. Jung's Understanding of Dreams in the Light of Modern Dream-Research』 (by Konstantin Rössler)</p> <p>分析心理学の中心的概念のひとつである「夢の理解」を見直すよい機会として、Jungエングの考え方が、現在の夢研究の背景に対してどのように立ち向かえるか?彼の概念は、夢の性質、意味、機能について今日の科学が述べていることに耐えられるのだろうか?という問いかけがなされた。その後、ユングの一連の仮説を徐々に裏付けつつある現在の夢研究が紹介された。その結果、夢の中のイメージは、覚醒意識と夢意識との間に、かつてあったものとありうるものとの間に、つながりや連続性を生み出すものであり、我々が「今あるもの」に集中することを補完するものであることが示された。これらのことから、分析心理学に見られるようなイメージとシンボルを理解する豊かな伝統は、夢研究の次のステップに役立つ理解を提供する可能性が示唆される。また、感情が夢の核心であり、イメージがその言語であるならば、どのような感情がイメージと結びついているのかという問いかけがなされた。今後、イメージを感情や意味へと変換していくことについて更に探求していく必要性を改めて感じるようになった。</p>
2025/8/28 (木)	午後	<p>Jung Institute, Museum C.G.Jung House Küsnacht, C.G.Jungの墓への訪問・見学</p> <p>Jung Instituteは、11年前に一度訪れたことがあるが、今回は案内してもらおうではなく、1人で訪問した。そのことによって、Küsnachtの街並みに触れ、どのような場にJung Instituteが建てられているかを肌感覚で知ることができた。チューリッヒ湖の湖畔に、他の住宅と大きく隔てられることなく、Jung Instituteは立っている。まず目を引くのは、庭を美しく飾る花々である。訪問者たちが、湖からの風を感じながら、庭で思い思いの時間を過ごしていた。Jung Instituteが、花や木、湖とつながることは、内界へと深く深く入っていく学問の場が、自然という外界と相互補完しながら成り立つことを示しているように思われた。Museum C.G.Jung House Küsnachtでは、Jungの旅行カバンやアフリカ訪問時の写真などが飾られており、異文化に触れ、別の視点から自身の考えや理論を捉え直すことで、Jungがその思想を発展させていった様子を感じることができた。C.G.Jungの墓は、共同墓地の一角にあり、地図や案内がなければ、どこにあるのかを見つけるのが困難であった。また、墓は、Jung個人のものではなく、Jung家の墓であり、Jungという人物を深く知っていく上でも、どのような家族の歴史の中で、Jungが生きていたのかを理解することの重要性を再確認することとなった。</p>
2025/8/28 (木)	午前	<p>the XXIII International Congress of Analytical Psychologyへの参加</p> <p>●『What has changed? Has anything changed? What needs to change? Does anything need to change? Late-career reflections on international analytical psychology』 (by Andrew Samuels)</p> <p>IAAPのCongressを軸に、ユング以降のユング心理学の歴史が振り返りながら、Jung派であるとはどういうことかという問いかけに対して Andrew Samuels氏が格闘してきた過程が示された。こうした問いかけは、Jung心理学を学んでいる出張者自身も考えていく必要があると思われる。今後も、他のオリエンテーションではなく、何故Jung派を志向するのかを自らに問いかけていきたい。</p> <p>●『The Place of Psychedelics in Jungian Analysis』 (by Leslie Stein)</p> <p>最近の研究を考慮しながら、ユング派分析家にとっての幻覚剤のプロトコルが示された。①精神薬は個性化を促進するモダリティであり、適切な場合には精神分析の補助として考慮されるべきである。②ユング派の分析家は、適切な場合、分析対象者を、できればユング派の分析家であって、精神薬投与の訓練を受け、精神薬補助療法士またはそれに相当する資格を持っている精神薬ファシリテーターに紹介することを考慮すべきである。③適切なケースは、主に、終末期の苦痛、がんの診断のショック、アルコール依存症、大うつ病性障害など、サイケデリックの有効性が証明されている場合である。④分析者は、③の状態でない場合でも、ケースの状況に応じて適切と思われる場合には、分析者にサイケデリックの投与を紹介することを検討することができる。⑤分析者は、紹介を検討する際、分析対象者が精神薬投与を受ける能力があるかどうか疑わしい場合には、分析対象者に事前の精神医学的評価を受けてもらわなければならない。⑥ユング派の分析家は、紹介を行った分析対象者に対して、通常の分析過程で幻覚剤を使用するための心構えを確立する役割を持つ。⑦ユング派の分析家は、幻覚剤体験で明らかになったことを、すでに進行中の分析過程に統合する重要な役割を担っている。これらのプロトコルから、終末期のがん患者に起こりやすい幻覚体験を、心理療法過程に統合していく役割をセラピストが担うことの大切さを再確認することができ、さらにがん患者の幻覚体験について探求していきたいと感じた。</p>
	午後	<p>Jung.C.G.が勤めたチューリッヒ大学・チューリッヒ工科大学への訪問・見学</p> <p>チューリッヒ大学精神科クリニックの「ブルクヘルツリ」において、Jungは多くの精神病患者に真摯に向き合い、その理論の基盤を形作っていった。また、1933年から1941年にかけて、Jungがチューリッヒのスイス連邦工科大学(E/TH)で行った公開講義では、ヨガや瞑想から夢分析や錬金術の心理学に至るまで、幅広いトピックを扱われた。2つの大学への訪問・見学を通して、アカデミックな世界を中心としたブルクヘルツリ時代から、Freudとの訣別後、公的な意味でのアカデミックな世界から遠ざかっていたJungが、自身の心理学を明確な形で打ち立て、再びアカデミックな世界に戻ってきた軌跡を辿ることができた。</p>

2025/8/29 (金)	午前	<p>the XXIII International Congress of Analytical Psychologyへの参加</p> <p>● 『"Ancestral Echoes and Paranormal Realms: A Convergence of Jungian, Indigenous, and Contemporary Psychotherapeutic Wisdom"』 (by Muriel McMahon)</p> <p>臨床事例を通して、心理的な癒しとして理解していることの限界を超えるような瞬間が訪れることが紹介された。そこから、①想像力を信頼すること、②肉体に耳を傾けること、③不気味さを異常としてではなく、イニシエーションとして信じること、の重要性が指摘され、魂がまだ語られていない物語に燃え、その物語がついに語られたとき、身体は癒されることが示唆された。これらのことから、心理療法における身体についてさらに探求していきたいと感じた。特に、身体疾患を持つクライアントにおける身体と身体疾患を持たないクライアントにおける身体を比較することで、その探求を進めていきたい。</p> <p>● 『"Maior autem animae pars extra corpus est (The greater part of the soul is outside the body): Jungian psychotherapy based on the concept of "psychological difference"』 (by Yasuhiro Tanaka)</p> <p>魂と人間の区別を指すW.Giegerich独自の「心理学的差異」の概念を心理療法の文脈で考える場合に想定される2つの側面として、次の2つの示された。①魂の次元と人間の次元を区別することによって、目の前の現象・症状・問題をより心理学的に理解する「心理診断」に関する側面、②魂の次元と人間の次元の区別がないために問題を抱えるようになった患者が、治療の中でどのように区別できるようになるのか、つまり「心理的差異」がどのように実現されるのか、という治療過程に関する側面。これらの2つの側面から、「月から帰還した女性のケース」が検討された。その結果、「高いところから下を見下ろしたときに経験する苦痛な感覚」という自我が体験する「痛み」は、魂がもたらす「癒やし」でもあり、それは、上記の2つの側面における①に相当することが指摘された。一方で、そのような「高さ」と同一化していた彼女が、ヒルマン (1994) の言う「低さ」あるいは「低次のもの」へと降りていく過程は、②の側面に相当することが指摘された。これらのことから、「心理的差異」は心理療法的作業の始まりと終わりに位置することが示唆された。</p>
	午後	<p>Jung.C.G.が幼少期から大学まで過ごしたバーゼル(バーゼル大聖堂・バーゼル大学)への訪問・見学</p> <p>プロテスタント牧師の父のもと、キリスト教に対する問いかけが、Jungの命題の1つになっていった。歴史を感じさせる美しい教会であるバーゼル大型堂を眼前にすると、幼少期にJungが見たバーゼル大聖堂に神が大便をする夢における、聖なるものと汚れ・穢れとの対比をより一層感じるようになった。汚れ・穢れは、その後の悪に対するJungの考えにも深く影響することになったのではないかと思われた。</p>
2025/8/30 (土)	午前	スイス(チューリッヒ空港)からオランダ(スキポール空港)を経由し、日本(関西国際空港)への移動
	午後	
2025/8/31	午前	スイス(チューリッヒ空港)からオランダ(スキポール空港)を経由し、日本(関西国際空港)への移動

○本出張によって得られた研究成果を下記①～⑤で発表の予定があれば該当するものを記入してください。

- ①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）、
- ②図書（著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数）
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）、
- ④授業での活用、
- ⑤その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

研究成果記入	①	清水亜紀子（2026）. (仮) 27th International Congress (International Society for Sandplay Therapy) ・ the XXIII International Congress of Analytical Psychology 印象記. 臨床心理研究 京都文教大学心理臨床センター紀要, (28). 清水亜紀子・山崎基嗣・小栗優・濱田和成・齊藤いつき・橘今日子・大橋良枝（2026）. (仮) 座談会『アウシュヴィツから何を受け取り、何を伝えていくか』を振り返って. 臨床心理研究 京都文教大学心理臨床センター紀要, (28). 清水亜紀子（2026）. (仮) ヨーロッパ珍道中～なんくるナイサー～. 学生相談室報告書, (22)
	②	
	③	座談会『アウシュヴィツから何を受け取り、何を伝えていくか』 2025年9月17日（水）15：00～18：00 京都文教大学 司会者・指定討論者；大橋良枝 発表者；山崎基嗣（島根大学）・清水亜紀子，小栗優・濱田和成・齊藤いつき・橘今日子
	④	夢・箱庭をはじめとしたイメージが心理療法においてどのように機能するのかやイメージに取り組む姿勢について，大学科目・大学院科目で活用していく。
	⑤	

○該当するものを以下に記載し、添付資料としてご提出願います。【必須】

	発表の方	調査の方	セミナー参加者
記入例	プログラム、抄録、原稿、PPTスライド等の写し 記録写真	収集資料写し、調査状況関連の資料等の写し、記録写真	配布資料写し、講義記録写し、記録写真

添付書類記入【必須】	①	27th International Congress (International Society for Sandplay Therapy) のプログラム
	②	the XXIII International Congress of Analytical Psychologyのプログラム
	③	the Anne Feankl Houseのチケット
	④	
	⑤	

次ページからの写真資料等はWebページでの公開を省略させていただきます